

令和6年度第2回学校運営協議会 議事録

○日時：令和6年12月19日（木）15：00～16：40

○場所：三刀屋高校掛合分校 音楽室

○出席者：学校運営協議会委員 5名（※50音順による 敬称略）

小川 真里（掛合町文化協会事務局）、白築 敏彦（掛合自治振興会事務局長）、
難波 順子（雲南市立掛合中学校長）、松村 知子（掛合子育て支援センター職員）、
吉村 淳（掛合分校PTA会長）

学校関係 2名

本間 達也（三刀屋高等学校長）、小川 剛（三刀屋高等学校掛合分校副校長）

○次第及び協議内容等（概要）

(0) 3年生個人課題研究（卒業研究）校内成果発表会の参観

(1) 今年度重点目標に対するこれまでの取組について

(2) 重点目標に対する評価について

学校評価（1月実施）

(3) 意見聴取

次年度の学校運営全般・教職員の人事要望について

(4) その他

○3年生個人課題研究（卒業研究）校内成果発表会の参観

- ・物怖じすることなく7分間よく発表していた。自分が研究してきたことを発表できたのではないかと。与えられた場を『向き合う。その先に…』の合言葉どおり達成していたと思う。
- ・就職先や将来の夢に向かって今後も取組を続けてほしい。
- ・一人ひとりが友人や教員の支えとともに自信をもって取り組んでいた。
- ・「発表態度（言葉・表現）、発表資料（資料）、研究内容（設定課題・資料調査・研究活動・考察）」の評価項目を軸にして、今後も課題研究に取り組んでもらいたい。
- ・参観はできなかったが、家族ぐるみで成果物の制作に取り組んだ

○今年度重点目標に対するこれまでの取組について

（副校長より報告）

- ・グランドデザインをもとに掲げた重点目標と具体策から、各校務分掌の目標を年度当初に設定した。
- ・特に、重点目標「3 自己表現のできる環境づくり」に対しては、各分掌がそれぞれの立場から目標を掲げ取り組んでいる。それに関しては、学校ホームページに行事・発行物ほか、活動の様子を掲載している。確認いただきたい。

○重点目標に対する評価について 学校評価（1月実施）

（副校長より提案）

- ・ 今月実施した職員会議以降の、学校評価のスケジュールを組んだ。1月には教職員・生徒・保護者のそれぞれを対象にアンケートを実施し、それらを取りまとめて校内で自己評価し、4校園連携「掛合の子どもを育てる会（掛合地区学校運営協議会）」で報告、第3回学校運営協議会で学校評価を提示し、学校関係者評価を受ける予定にしている。
- ・ 「目標に対する評価」を得ることはもちろんだが、各校務分掌等の細かな仕掛けに対する評価を得たいという考え方は素晴らしいことである。そういった観点も大事にしたい。

○意見聴取 次年度の学校運営全般・教職員の人事要望について

①学校運営

- ・ 掛合分校の体育館及びグラウンドについて背景と現状報告、今後について

②教職員の人事要望について

- ・ 掛合分校の教職員数の現状と課題について

①②で審議したことを、学校運営協議会からの要望として県教育委員会へ申出を提出する。

- ・ 毎回の体育授業時において、小・中学校の体育館への移動に往復する時間の制限、悪天候時等の安全確保に困難が生じている。県教委の考えを聞きたい。
- ・ 主幹教諭の果たす役割が年々変わり多岐に渡ってきていても、様々な活動鶴をするには必要な立場である。分校にだけ配置がないのはおかしい。
- ・ 掛合新体育館建設に向けて、市へ陳情書を提出する予定がある。新体育館には避難場所としての機能面や現中学校体育館・武道場の老朽化に向けた対策を考慮する必要がある。

○その他 意見交換等ででた主な意見等（概要）

- ・ 3年生卒業研究発表会の2年生司会がハキハキしていた。アドリブを入れてもよいのではないかとアドバイスしたところ「ほめられた」と喜んでいて、ほめたことに対して喜ぶ素直さには向上心がうかがえる。
- ・ 山陰中央新報「こだま」欄において、3年生が書いた、音訳ボランティアの経験から過去の自分を振り返り、自信をもてた体験談を読んだ。地域の人たちもこの記事を読んでおり、自分たちも成長していきたいと感じている。
- ・ S S Wの関わりについては、途切れないように継続性のあるものにしてもらいたい。
- ・ 特別な支援を要する生徒には担当や立場、外部機関等を上手にすみわけしながら、活用の幅を広げてほしい。
- ・ 県外先進校視察において、フリースペースの活用の報告に、今後の可能性が広がると感じられた。
- ・ 掛合ふるさと祭りの掛合太鼓披露の場で、教職員も一緒になって活動しておられたことが素晴らしい。
- ・ P T Aの立場から、音訳ボランティアの経験など、机に向かって勉強する以外、学び直しの場も含めて、分校生に合ったスタイルである。教職員には生徒一人ひとりに深く関わってもらっている。
- ・ 短大オープンスクールに参加した際に、学生たちが島根半島に住む人々の困り事をインタビューし、その解決に向けてどう取り組むか、この先の方針等の発表があった。こういった探究プロセスは今後の社会でも生かせるものである。我が子の同級生たちの成長の跡が見て取れる。社会に出て活かせる人をいかに育てるか、分校は教育の最先端を担っている。